

太宰「人間失格」の方法についての一考察

山 本 勝 正

一

「人間失格」(昭23・6・8)の主人公は、いうまでもなく大庭葉蔵である。太宰が、この大庭葉蔵という名前に強いこだわりをもっていたことは、初期の作品「道化の華」(昭10・5)において使っていることからいえる。太宰は「道化の華」で、大庭葉蔵の名前について、次のように述べている。

だいいち、大庭葉蔵とはなにごとであらう。酒でない、ほかのもつと強烈なものに酔ひしれつつ、僕はこの大庭葉蔵に手を拍った。この姓名は、僕の主人公にびつたり合った。大庭は、主人公のただならぬ気魄を象徴してあますところがない。葉蔵はまた、何となく新鮮である。古めかしさの底から湧き出るほんたうの新鮮さが感ぜられる。しかも、大庭葉蔵とかう四字な

らべたこの快い調和。この姓名からして、すでに画期的ではないか。その大庭葉蔵が、ベッドに坐り雨にけむる沖を眺めてゐるのだ。いよいよ画期的ではないか。

この引用からも、太宰の、大庭葉蔵という名前への思い入れがよく分かる。そのような大庭葉蔵が、「人間失格」の主人公として再び登場する。この作品での、太宰の名前の使い方は、かなり意識的である。もちろん、意識的といえば、他の作品についてもいえることだが、この「人間失格」は、他の作品以上に意識的であるといえる。そこで、まずは、大庭葉蔵の名前について考えてみたい。「道化の華」においては、今みた箇所と、それ以外の箇所にも大庭葉蔵という名前が、フルネームで使われている。もちろん、「人間失格」の主人公が大庭葉蔵であることは、読者に分かるようになっていたが、この作品「人間失格」では、大庭葉蔵という名前は一度も使われていないのである。「道

化の華」でいう、「大庭葉蔵とかう四字ならべたこの快い調和」がみられないのである。

主人公大庭葉蔵は、「はしがき」では「私」によつて、「その男」、「その子供」、「この子」と呼ばれて、名前は出てこない。「第一の手記」にいたつて、まず長兄から、「葉ちゃん」といわれ、次に父親から、「葉蔵」といわれ、葉蔵という名前が分かるようになっていく。「第二の手記」にいたつて、中学の教師の「このクラスは大庭さへゐないと、とてもいいクラスなんだが、」によつて、大庭という姓が分かる。太宰は意識的に少しづつ、名前を出すことによつて、大庭葉蔵という名前が分かるようにしている。ところが、このあと、葉蔵は、京橋のスタンド・バアの店の常連たちに、「葉ちゃん」（「第三の手記」）、そのバアのマダムに、「葉ちゃん」（「あとがき」）と呼ばれることはあつても、「大庭葉蔵」という姓名で呼ばれることはないのである。この作品の中で、姓名の分かる人物は、大庭葉蔵と堀木正雄の二人である。それでは、堀木の場合はどうか。たとえば、

その画学生は、堀木正雄といつて、（「第二の手記」）

浅草の堀木正雄の住所姓名を記して、こつそり、ヒ

ラメの家を出ました。（「第三の手記」一）
である。また、葉蔵は、

「堀木正雄は？」

ともいつている。このことから、葉蔵が、「大庭葉蔵」という姓名で呼ばれることがないということが、意識的であることが分かる。

大庭葉蔵は、結局、彼がのぞんだ絵画きになれず、漫画家になる。

自分は、上司幾太（情死、生きた）といふ、ふざけ切つた匿名で、汚いはだかの絵などを書き、（「第三の手記」一）

とあるように、上司幾太という名前をもつことになる。堀木にも、

「恥知らずさ、流行漫画家上司幾太」（「第三の手記」二）

といわれる。ここでは、本当の名前ではないが、「上司幾太」と、姓名で呼ばれている。このことから、太宰は意識的に、「大庭葉蔵」と呼ばれることを避けているといえないだろうか。⁽¹⁾

それでは、そのことは、何を意味しているのだろうか。それは、主人公大庭葉蔵が、自己を確立できなかったこと

を意味しているのではないだろうか。名前で呼ばれることはあっても、姓で呼ばれることはあっても、漫画家のペンネームである、「上司幾太」と呼ばれることはあっても、

一度も、その姓名である「大庭葉蔵」と呼ばれることはない。たとえば、姓が、社会や制度を、名前が自己をあらわしているといえれば、結局、彼が社会と自己を一致、調和させることができなかつたことを意味している。大庭葉蔵が自己を確立することができなかつたことを意味しているといえよう。それでは、大庭葉蔵の自己確立は、どこにあるのか。彼は、子供の頃から道化で自己をごまかして生きていたのだが、ある時、竹一から見せてもらった、ゴッホの「お化けの絵」(「第二の手記」)をみて、一種の芸術開眼を体験する。道化などで自己をごまかさず、自己の内的な真実を表現した絵をみて、自分も、自分の正体を描いた自画像を完成する。その絵をみた竹一が、「お前は、偉い絵画きになる。」(「第二の手記」)と予言する。その竹一の予言を実現すること、すなわち、「偉い絵画き」になり、社会で認められることが、道化で自己をごまかさず、自己の真実に生きることによって、「偉い絵画き」になることが、彼の自己確立を意味することであった。しかし、彼は、それができず、結局、「無名の下手な漫画家」(「第三の手

記」一)にしかねなかつた。このことについては、東郷克美氏の、

葉蔵は「偉い絵画き」にならずに「無名の下手な漫画家」になつた。あの「お化け式手法」を会得したにもかかわらず、彼が「漫画家」になるのは、「都会」に出てからますます「世間」を恐れ、自己の「正体」をひた隠しにして「道化」に徹することと関係がある。つまり「お化け式手法」を放棄した「漫画」⁽²⁾と、実生活における「道化」は正確に対応している。

という指摘の如くであろう。ともかく葉蔵は、「大庭葉蔵」になれず、「上司幾太」になつたといえるのではないだろうか。

葉蔵は自己を確立することができずに、自己を喪失し、人間を失格することになる。「廃人」(「第三の手記」二)となつた彼は、最後に故郷へ帰るが、その故郷も、もはや彼に安息を与えるものではなくなつていた。それは、東郷克美氏の、

しかし、今や、故郷も彼に安息を与えはしない。それどころか「テツといふ老女中に数度へんな犯され方」さえする。つまり、故郷という「母性」はもはや彼をやさしく抱きとり、うけ入れてくれるものではなく、

むしろ色あせた「六十に近いひどい赤毛の醜い女中」と化して彼を「犯」すのである。⁽³⁾

という指摘の如くであろう。葉蔵は、人間失格にいたった自分の手記を、親しい関係にあった、京橋のスタンド・バアのマダムに送るのであるが、その時、マダムが「その小包には、葉ちゃんの住所も、名前さへも書いてゐなかつたんです。」（「あとがき」）というように、葉蔵は、手記を、住所も、名前も書いていない小包に入れて送るのである。

このことの意味は重要である。また、このことと関連していることとして、次の場面を挙げることができる。葉蔵は、ツネ子との心中事件のあと、ヒラメの家に寝起きすることになるが、そこにいたたまれなくて、彼の家から逃げて出る時、書き置きをする。その書き置きに、「浅草の堀木正雄の住所姓名を記」（「第三の手記」一）すのである。太宰は、この事を「その時、ふつと、記憶の底から浮んで来たままに堀木の住所と姓名を、用箋の端にしたためたまでの事だつたのです」（同）とくりかえし表現している。これは、葉蔵が、自分の手記を入れた小包に住所、名前を書かなかつたことと、書き置きで、葉蔵が堀木の住所、姓名を記したことと対照的であり、太宰が、葉蔵が手記を入れた小包に住所、名前を書かなかつたことを意識的にしている

ことは間違いないであろう。

葉蔵が手記を、住所も名前も書いていない小包に入れて、京橋のスタンド・バアのマダムに送ったことについては、高田知波氏の

返信の到来によつて自分の言説が批評され相対化される可能性をあらかじめ断ち切つておくことによつて、葉蔵の「物語」は完結させられるのである。⁽⁴⁾

という意見もあるが、そのこと以上に、大庭葉蔵が、住所を書かなかつたことによつて、故郷を喪失したことを、名前を書かなかつたことによつて、自己を喪失したことを意味するということになるとはいえないだろうか。葉蔵がマダムに送った小包に、住所も、名前も書いていなかったことは、葉蔵の故郷喪失、自己喪失を意味しているといえよう。

二

次に、大庭葉蔵と、他の登場人物の名前を比較して考えてみたい。まずは、竹一、堀木、洪田の三人と比較して考えてみたい。この三人を並べてみると、竹一は名前だけ、堀木は、堀木正雄という姓名があり、洪田は姓だけであることが分かる。特に竹一と、堀木の二人が、葉蔵の名前との関連で付けられたことは、竹一の「竹」、堀木の「木」、

葉蔵の「葉」と、三人の名前が植物にちなんていることくらいえよう。そして、そのことは、これら三人の人物設定が、作者太宰にとつて意識的に関連づけられていることを意味する。

それでは、この三人の人物設定上における共通点、相違点について考えてみる。竹一に姓が無くて名前だけであることが、作者にとつて、意識的であることは、次の表現で明らかである。

その生徒（姓はいま記憶してゐませんが、名は竹一といつたかと覚えてゐます）（『第三の手記』）

「白痴」（『第二の手記』）、「全智全能の者」（『第一の手記』）といわれる竹一は、「狂人」（『第二の手記』）、「第三の手記」（『第二の手記』）、「（あどがき）」といわれる葉蔵の分身であろう。そして、葉蔵と、竹一との違いは、道化の有無にあるといえる。姓がない、名前だけの竹一には、社会に適應しようと考えないので道化を演じる必要がない。姓をもっている葉蔵は、社会に適應しようとするために、道化を演じる必要があるのである。

次に堀木と葉蔵について考えてみる。二人については、つまり、自分はその時、生れてはじめて、ほんものの都会の与太者を見たのでした。それは、自分と形は

違つてゐても、やはり、この世の人間の営みから完全に遊離してしまつて、戸惑ひしてゐる点に於いてだけは、たしかに同類なのでした。さうして、彼はそのお道化を意識せずに行ひ、しかも、そのお道化の悲惨に全く気がついてゐないのが、自分と本質的に異色のところでした。（『第二の手記』）

とある。この引用からも分かる如く、大庭葉蔵と、堀木正雄は、「この世の人間の営みから完全に遊離してしまつて、戸惑ひしてゐる点に於いて」は、「同類」なのである。また二人が似ていることについては、「同じ形の同じ毛並の犬」（『第三の手記』）という表現もある。そして、二人の名前についての違いは、二人ともそれぞれ、大庭葉蔵、堀木正雄と姓名があるが、二人が姓名で作品に登場するか、しないかというところにある。「大庭」とか「葉蔵」とか「葉ちゃん」とかいわれることはあつても、「大庭葉蔵」という姓名で登場しない葉蔵と、既に見た如く、「堀木正雄」という姓名で、数回登場する堀木とは、明らかに違うといえる。それは、今の引用からも分かる如く、道化の悲惨さに気づいている葉蔵と、道化の悲惨さに気づいていない堀木の違いとして描かれている。

また、浜田は、姓だけであり、名前だけの竹一と対照的

である。その名前において、共通点がない、全く対照的である二人に共通する所はない。洪田は、「ヒラメ」と呼ばれ、葉蔵からは、次のようにみられている。

自分は、その時の、頸をちぢめて笑つたヒラメの顔の、いかにもずるさうな影を忘れる事が出来ません。輕蔑の影にも似て、それとも違ひ、世の中を海にたとへると、その海の千尋の深さの箇所に、そんな奇妙な影がたゆたうてゐさうで、何か、おとなの生活の奥底をチラと覗かせたやうな笑ひでした。(『第三の手記』)

一)

それに対し、竹一は、次の如くである。

クラスで最も貧弱な肉体をして、顔も青ぶくれで、さうしてたしかに父兄のお古と思はれる袖が聖徳太子の袖みたいに長すぎる上衣を着て、学課は少しも出来ず、教練や体操はいつも見学といふ白痴に似た生徒でした。(『第二の手記』)

そして、葉蔵は、「自分もさすがに、その生徒にさへ警戒する必要は認めてゐなかつたのでした。」(同)と、竹一をみている。今みた如く、葉蔵に、全く対照的な存在とみられている洪田と、竹一は、その社会的な適応において、その名前においてあらわれているように、全く対照的な存

在であるといえよう。

三

次に、葉蔵と親しい関係にあつた女性について考えてみたい。中学時代の下宿先の姉妹、アネサ、セツちゃんからツネ子、シヅ子、シゲ子、ヨシ子、テツと、大かたの女性たちは、姓がなく、名前だけで、その名前もカタカナで表記されている。このカタカナ表記は、『人間失格』に影響を与えたといわれる、芥川の『河童』(昭2・3)に登場する、河童たちの名前が、たとえば、トツク、チャツク、マツグとかのように、カタカナ表記であることからきているのかもしれない。ともかく、作者が、意識的に女性たちの名前を、カタカナで表記していることは間違いない。⁽⁶⁾

関礼子氏は、『人間失格』における、女性のカタカナ表記を積極的に評価され、

彼女たちはカタカナ表記によつて、すでにおなじみの女性名の類型から区別されているのである。ここに太宰の採っている小説戦略上の特徴のひとつがみられる。「まえがき」「あとがき」の付与によつて小説に、いわゆる「私小説」らしくない構成的な印象をあたえたように、女性名のカタカナ表記は、既存の小説から

このテキストを差異化する戦略といえよう。いつけん名前のカタカナ化は、女性たちから固有性を奪うようであるが、事実は逆である。もしかりに静子／司津子／志津子などと表記されたら、読者は既存のテキストの女性名との類縁を感じ、そのことによって『人間失格』というテキストの一回性を損ねられたことを不服におもудらう。あるいは、歴史的連想基盤に富む漢字でもなく、ひらがなでもない、きわめてニュートラルな表音文字であるカタカナは、聴衆のかつてな連想を抑制し、「香具師」のほしいままな人物造型を可能にするための方法ともいえるだろう。⁽⁷⁾

と述べておられる。確かに、氏がいわれるように、カタカナ表記は、作者の自由な人物造型を可能にする方法として、評価できるといえるかもしれない。ただ、ここで、葉蔵の親しい女性の中で、ただ一人、名前がカタカナ表記でない女性、名前が無いので当然であるが、京橋のスタンド・バアのマダムについてふれておきたい。彼女は、葉蔵と相当親しい関係にあり、また、時間的にいつても、葉蔵との関係が一番長かったと思われる。にもかかわらず、彼女には名前がない。このことについては、高田知波氏の、次の指摘の如くであろう。

マダムについてだけは名前も年齢も示さないだけでなく、いつどのよう知り合ったのかについての経緯も、同棲生活の具体的記述も、同棲相手としてのこの女性に対する印象や批評といったコメントもないという極端な省筆によって明らかに他の女性たちとは区別され、女性遍歴の物語の圏外に置かれている感が強いのは、マダムそのひとがエクリチュールの読み手として最初から選ばれていたからにはかなるまい。⁽⁸⁾

それでは、葉蔵にとって大きな事件をおこすことになる二人の女性、ツネ子とヨシ子について考えてみたい。葉蔵、ツネ子、ヨシ子の三人に共通するイメージとして、葉蔵の「葉」に基づく「葉」のイメージがある。葉蔵については、

「水底の岩に落ち附く枯葉」のやうに、わが身は、恐怖から不安からも、離れる事が出来るのでした。

〔第二の手記〕

とある。またツネ子については、

そのひとも、身のまはりに冷たい木枯しが吹いて、落葉だけが舞ひ狂ひ、完全に孤立してゐる感じの女でした。(同)

とある。ヨシ子については、

ヨシ子の無垢な信頼心は、それこそ青葉の滝のやうにすがすがしく思はれてゐたのです。(「第三の手記」)

(二)

とある。また、「青葉」については、ヨシ子と関連して使われている例として、他に次のような例を挙げることが出来る。葉蔵が、ヨシ子に出会う以前の、

人間に対する恐怖から解放せられ、青葉に向つて眼をひらき、希望のよろこびを感じるなどといふ事は出来ないでした。(「第二の手記」)

や、ヨシ子と結婚する前の、

結婚して春になつたら二人で自転車で青葉の滝を見に行かう、とその場で決意し、所謂「一本勝負」で、その花を盗むのにためらふ事をしませんでした。(「第三の手記」)

(二)

や、ヨシ子の事件の後、彼女を信頼することができなくなつた時の、

自転車で青葉の滝など、自分には望むべくも無いんだ。(同)

がある。葉蔵が「枯葉」のイメージで、ツネ子が「落葉」のイメージで、ヨシ子が「青葉」のイメージで表現されて

いるということが分かる。また、これらのイメージは、それぞれの人物の存在と見合っていることはいうまでもない。葉蔵は、銀座のカフェの女給で、夫が入獄し、本所でわびしい下宿暮らしをしていたツネ子と、「はじめて、われから積極的に、微弱ながら恋の心の動くのを自覚」(「第二の手記」)した彼女と心中を決行する。その叙述過程で、呼称が、ツネ子から「女」に変換されている。それは、葉蔵が二度目にツネ子のカフェを訪れた後、酒に酔つて、彼女の下宿に泊まった時である。夜明け方、ツネ子が「死」という言葉を出す。そこから「女」という呼称に変わる。その場面は次のように続く。

それから、女も休んで、夜明けがた、女の口から「死」といふ言葉がはじめて出て、女も人間としての営みに疲れ切つてゐたやうでしたし、また、自分も、世の中への恐怖、わづらはしさ、金、れの運動、女、学業、考へると、とてもこの上こらへて生きて行けさうもなく、そのひとの提案に気軽に同意しました。

(中略)

その夜、自分たちは、鎌倉の海に飛び込みました。女は、この帯はお店のお友達から借りてゐる帯やから、と言つて、帯をほどこき、畳んで岩の上に置き、自分も

マントを脱ぎ、同じ所に置いて、一緒に入水しました。

女のひとは、死にました。さうして、自分だけ助かりました。(『第二の手記』)

ここで、「女」という呼称は終わり、その後、「死んだツネ子」が恋ひしく、めそめそ泣いてばかりいました。(『同』)という如く、「ツネ子」という呼称にもどっている。このように、心中の相談から決行という重要な場面が、「女」という呼称に変換している事について、国松昭氏は、

葉蔵が彼女に逢った頃はへそのひとであり、一夜を過ごしてからはへツネ子であり、死を決意したあたりからはへ女となり、最後はへ女のひとは、死にましたである。私の語感では、葉蔵の親しみ、一体感、物体視(死を決意した段階ですでに死んでいるのである)というような気持ちが現れているように思える。(9)

と述べておられる。そのような見方もできるかもしれない。それに對し、高田知波氏は、

私は「ツネ子」という固有名詞を消して「女」という普通名詞に変えることによって、葉蔵の「孤独の匂ひ」を「本能的に嗅当て」くる存在という(葉蔵物語)の「女」一般についての規定の中にツネ子の個別性を溶解させてしまおうとする語り手・葉蔵の意図を読み

たいと思う。(10)

と述べておられる。高田氏の指摘の通り、ツネ子という固有名詞を消すことによって、ツネ子の個別性を、「女」一般についての規定の中に溶解させてしまっているといえよう。問題は、この事件において、葉蔵とツネ子の間に真剣な話し合いがなく、葉蔵がツネ子と真剣に向かい合うことなく、心中を行っているということである。それがツネ子という固有の名前を消して、一般的な「女」という呼称に変換してしまったところに現われているといえよう。結局、葉蔵は、ツネ子と人格的なふれあいをすることはなかったといえる。

それでは、この作品の中の、もう一つの大きな事件をおこすヨシ子について、その事件を中心に考えてみる。葉蔵は、煙草屋の、ヨシ子という、人を疑うことを知らない若い女性を内縁の妻にし、「人間らしい」(『第三の手記』)生活を始めるところが、ある夏の夜、そのヨシ子が、三十歳前後の無学な小男の商人に犯される。その事件があつて以来、葉蔵は破滅の道を歩む。モルヒネ中毒に陥り、脳病院に入院させられ、廃人になって故郷に帰っていく、その意味で、葉蔵にとってヨシ子の事件は、大きな意味をもつ事件であつた。ここで問題になるのは、ヨシ子の事件

後の葉蔵の態度である。葉蔵は、事件の後、次のように考
える。

ゆるすも、ゆるさぬもありません。ヨシ子は信頼の
天才なのです。ひとを疑ふ事を知らなかつたのです。
しかし、それゆえの悲惨。

神に問ふ。信頼は罪なりや。

ヨシ子が汚されたといふ事よりも、ヨシ子の信頼が
汚されたといふ事が、自分にとつてそのち永く、生
きてをられないほどの苦悩の種になりました。自分の
やうな、いやらしくおどおどして、ひとの顔いろばか
り伺ひ、人を信じる能力が、ひび割れてしまつてある
ものにとつて、ヨシ子の無垢な信頼心は、それこそ青
葉の滝のやうにすがすがしく思はれてゐたのです。そ
れが一夜で、黄色い汚水に変つてしまひました。

(中略)

果して、無垢の信頼心は、罪の源泉なりや。(「第三
の手記」二二)

この事件の時、問題なのは、葉蔵が事件にあったヨシ子
その人の痛みでなく、ヨシ子の「無垢な信頼心」⁽¹¹⁾が悲惨な
事件を招いたことの意味を問おうとしてゐることである。
ヨシ子の苦しみを分かち合つて、二人で人生を生きていこ

うとするのでなく、ここで、「青葉」のイメージのヨシ子
を、「黄色い汚水」というイメージに変わったと表現して
いるように、ヨシ子が、葉蔵にとつて、この事件で、違つ
た人間になつてしまつたとしてゐるのである。葉蔵にとつ
て、事件後のヨシ子は、もはやかけがえのない人物とはい
えなくなつてしまつてゐる。柳田知常氏の、

この時、葉蔵は眞実ヨシ子を愛しているのか、いな
いのか。ヨシ子を愛していないで、単独に「信頼は罪
なりや」と問ふことは無意味である。

(中略)

ヨシ子の事件は、ただ葉蔵を悲惨な境遇に落とし込ん
でゆく道具に使われているだけだ。葉蔵は人格的にヨ
シ子に向き合つていない。⁽¹²⁾

という指摘の如くであらう。また、最近の論考としては、
細谷博氏の、

一見妻の側に身を置いているかのやうに見えるが、
どうであらうか。結局は妻の現実から逃避してしまふ
展開からも分かるように、「自分」の苦悩の中心にあ
るのは傷ついた生身のヨシ子というよりも、あくまで
「無垢の信頼心」という觀念を負わされた妻のイメー
ジであるともいえそうである。⁽¹³⁾

という指摘もある。ヨシ子の事件の後の葉蔵の対応ぶり、彼が、ヨシ子と、真剣に向き合っていないことが分かる。

そして、そのことは、発想の次元で、太宰が登場する女性に、それぞれ固有の名前を与えないで、多くの女性を、一律にカタカナ表記にしまっていることにつながっているのではないか。葉蔵とヨシ子が真剣に向き合って生きていく姿を描こうとしたなら、彼女を他の女性たちと同じように、カタカナ表記にすることはなかったであろう。ヨシ子は、他の多くのカタカナ表記の女性たちと同じように、葉蔵を「悲惨な境遇に落し込んでゆく道具」でしかないのである。

ともかくツネ子との事件、ヨシ子の事件で明らかのように、葉蔵にとって、ツネ子や、ヨシ子が、本当の意味で、かけがえない個人として存在していないのである。そして、その事が、肝心の場面で、ツネ子の名前を消して、「女」に変換してしまったところに、ツネ子、シヅ子、ヨシ子、テツというように、葉蔵と親しい関係になった、多くの女性に、姓を与えず、固有の名前を与えないで、安易なカタカナ表記の名前にした所にあらわれているといえよう。そこに、この「人間失格」という作品の物足りなさがあるのかもしれない。

奥野健男氏に、

主人公は、自己にあくまで忠実でありながら、人間に對し、どこまでも真実の愛と信頼を求めようとし、そのために人間社会から葬られ、敗北して行く過程を書いている。⁽¹⁴⁾

とされる、「人間失格」であるが、小田切進氏の、

自分のデカダンのためには沢山の女性を犠牲にしてはばからぬ自身のエゴイズムに触れられない苦悩では、どんなにそれが痛切であつても、自己中心の苦悩ではなく、他者を慰めることはできても、普遍的な真実には遠く及ばない。⁽¹⁵⁾

の指摘の如くであろう。従って、最後の、有名な京橋のスタンド・バアのマダムの言葉、

「私たちの知つてゐる葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さへ飲まなければ、いいえ、飲んで、……神様みたいないい子でした。」

(「あとがき」)

を、「そのまま、作者のこの作品にこめられた祈願であろう。⁽¹⁶⁾」とか、「己れを受難のキリストに擬せんとした太宰の願望がひそかににじむかとみえる。」⁽¹⁷⁾とかはいえても、作品の実質は、そのような作者の願いを裏切っているのである。

以上の如く、「人間失格」における、名前と、呼称をみていくことは、「人間失格」の特質と問題点を明確にすることであるといえよう。

注

(1) このことと同じではないが、同様の発想とも考えられるのは、『ヴィヨンの妻』（昭22・3）の大谷の妻の名前である。妻の本当の名前は、結局は分からない。ただ、働きにいった店での名前は「さつちゃん」である。大谷が、作品の最後で、妻を店での名前である「さつちゃん」と呼んでいる。このことは彼女が、家庭を守ることではなく、家庭の中の幸福でなく、家庭の外に生きがいを見出していることをあらわしているといえよう。

(2) 東郷克美『「人間失格」の渴望』（東郷克美・渡部芳紀編『作品論 太宰治』双文社出版 昭49・6 三六七頁）

(3) 注(2)に同じ。三七一頁

(4) 高田知波『「人間失格」と「葉藏物語」』（『駒沢国文』31号 駒沢大学文学部国文学研究室 平6・2 七七頁）

(5) 「全智全能の者」は、直接竹一のことをいっているのではないが、「あるひとりの全智全能の者に見破られ、木つ葉みぢんにやられて、死ぬる以上の赤恥をかかせられる。」（『第一の手記』）という表現が、後に葉藏が竹一に道化を見破られることの伏線となっている。そのような意味で、「全智全能の者」は、竹一のことであるといえよう。

(6) 直接関連することではないが、「斜陽」（昭22・7・9）

には、主要人物の中にカタカナ表記の名前をもつ女性がいる。直治が、その遺書の中で、上原の妻の名前を「スガちゃん」（七）といっている。これは、かず子の名前を逆にしてつけられた名前である点で、意識的につけられた名前である。太宰が何を考えて、このような名前をつけたのかは分からないが、意味がないとも思えないので一応指摘しておく。

(7) 関礼子「男性Ⅱ男声物語としての『人間失格』」（江種満子他著『男性作家を読む フェミニズム批評の成熟へ』新曜社 平6・9 四四頁）

(8) 注(4)に同じ。六六頁

(9) 国松昭『「人間失格」 「暗夜行路」と比較して』（『太宰治』創刊号 洋々社 昭60・7 八七頁）

(10) 注(4)に同じ。七三頁

(11) 谷沢永一氏は、ここであるヨシ子の「無垢な信頼心」について、「判断と選択にもとづく精神の決意および努力としての「信頼心」、そのような「信頼心」のせいではまっただくなかったこと、（中略）ヨシ子は単に、「ひとを疑ふことを知ら」なかっただけにすぎない。」（『国文学』24号 関西大学国文学会 昭34・1 六七頁）と述べておられる。

(12) 柳田知常『「人間失格」（太宰治）について』（『金城学院大学論集』5集 金城学院大学 昭30・4 一四三頁）

(13) 細谷博『「人間失格」の（人間肯定）——語りのサーピス

と笑い」〔南山国文論集〕19号 南山大学国語学国文学
会 平7・3 三七頁

(14) 奥野健男「解説」〔定本太宰治全集 第九卷 筑摩書房
昭37・11 四〇〇頁〕

(15) 小田切進「人間失格」論〔「解釈と鑑賞」25巻3号 至
文堂 昭35・3 六八―六九頁〕

(16) 亀井勝一郎「人間失格」〔亀井勝一郎編『近代文学鑑賞
講座 第十九卷 太宰治』角川書店 昭34・5 一三三頁〕

(17) 佐藤泰正「人間失格」〔「如是我聞」との関連をめぐつ
て〕〔「太宰治」創刊号 洋々社 昭60・7 六〇頁〕

(本学教授)